戦前に国際的に活躍した日本人動物心理学者について

高砂美樹¹⁾

International contributions of Japanese animal psychologists before WWII

MIKI TAKASUNA¹⁾

Abstract By the end of World War II, five Japanese researchers had published their psychological researches with animals in English journals. In the present paper, I highlight two of these researchers, Ryo Kuroda and Gennosuke Yoshioka (alias Joseph G. Yoshioka), in terms of their international contributions. In contrast to Kuroda, who did not study abroad, Yoshioka conducted research in the U. S. under prominent animal psychologists such as Edward C. Tolman, Karl S. Lashley, and Robert M. Yerkes. Kuroda experimented with various species ranging from lower vertebrates to monkeys, while Yoshioka mainly used rats in his work. Although their careers took different paths, they shared a similarity in that both remained outside Japan's mainstream psychology.

Key words : history of animal psychology, international contribution, Ryo Kuroda, Joseph G. Yoshioka.

1. はじめに

日本で動物心理学の研究が始まったのは19世紀末のことである。東京帝国大学で最初に実験心理学の研究を行った元良勇次郎（もとら ゆうじろう、1858-1912）の弟子にあたる増田惟茂（ますだ これしげ、1883-1933）が日本で最初の動物心理学者にあたる。卒業論文「意志作用の比較心理学的研究」（増田、1908-09）では被験体にスズメなど3種類の小鳥を用いて、採餌の試行錯誤学習に関する実験を行った。増田にはほかにも魚類の学習実験（増田、1915）の研究があり、コイやキンギョにおいて罰を用いた方法で弁別学習が成立するかどうかについて検討を加えている。

増田は1919年より2年ほど国費で派遣されて欧米に滞在している。なかでもアメリカには1年半滞在して Edward C. Tolman などと会っており、この

留学の間の見聞は「海外心理学輿論の諸傾向と其代表者及著述」（増田、1923-24）に反映されている。しかし、留学によって国際的な学問の状況について把握できたということはあるものの、増田が国際的に活動したとはいえない。

それでは、いつごろから日本人で国際的に活躍した動物心理学者は現れるのだろうか。本稿では期間を戦前に限定して、国際的に活躍した動物心理学者について論じる。

2. 戦前に国際的に活躍した動物心理学者

まず初めに、国際的に活躍したということをどのように定義するのかについてであるが、本稿では留学の有無とは関係なしに、「海外専門誌に掲載された研究がある」「海外の学会で発表したことがある」「海外の研究者と相互に連絡をとりあっていたこと

1) 東京国際大学人間社会学部
〒350-1198 埼玉県川越市の場2509
連絡先：高砂美樹
E-mail: takasuna@tiu.ac.jp

1) School of Human and Social Sciences, Tokyo International University
Corresponding author: MIKI TAKASUNA

Published online in J-STAGE: December 28, 2012
doi: 10.2502/janip.62.2.2

がある」という観点から決めることとした。また海外にあたる国々には、当然のことながら、当時の日本国の領土を反映させているため、京城帝国大学（現在の韓国）や台北帝国大学（現在の台湾）や建国大学（現在の中国）における活動は国内の活動とみなした。

戦前すなわち1945年8月までに海外の専門誌に掲載された日本人著者の論文の数は90編を超える（高砂, 1999）。そのうち、動物心理学に関係する論文を掲載したことがあるのは5人である。このうち、歴史的に最も早いのは神田左京（かんだ さきょう, 1874-1939）で、アメリカ Minnesota 大学に留学し、Jacque Loeb の研究室で主として海生動物を用いて向性や走性の研究を行った（Kanda, 1915）。神田の論文は心理学の雑誌のほか生理学の雑誌にも掲載されている（Kanda, 1914a,b）。Sigmund Freud が渡米したことで知られる1909年の Clark 大学開学20周年の行事の折に、神田は G. S. Hall のところで修士課程の大学院生として勉強しており、Freud や Hall を囲む集合写真（たとえば Boakes, 1984, p.166）には日本からの留学生で東京帝大出身の蠣瀬彦蔵（かきせ ひこぞう, 1874-1944）とともに写っている。

移川子之蔵（うつりかわ ねのぞう, 1884-1947）は1915年ごろ Harvard 大学の Robert M. Yerkes のもとで、近交系と非近交系の Wistar ラットを用いて気質の違いに関する研究を行った（Utsurikawa, 1917）。のちに台北帝国大学の教授として民族学を教えているが、帰国後に動物心理学領域との関わりはない。

高良（旧姓 和田）とみ（こうら とみ, 1896-1993）は戦前の動物心理学の研究に関連した日本人のなかで、唯一の女性である。1920年に高良は Edward L. Thorndike のところで修士号を取得したのち、Johns Hopkins 大学の Curt P. Richter と一緒に空腹に関する研究を行い、Thorndike のところへ提出した学位論文により、1922年に Ph.D. を取得した。この学位論文（Wada, 1922）の中心にあるのはヒトの生理心理学にあたる研究であるが、ラットを用いた空腹の研究も行っている。高良とみはこの空腹の研究を出発点として平和活動に尽力するようになり、戦後は参議院議員として2期務めるなど社会的活動で知られるようになった。

以上の3人に共通な特徴は、明治・大正期において留学していたこと、そして Loeb や Thorndike, Richter や Yerkes といった著名な動物心理学者のもとで学位を取得したことであるが、しかしいずれの研究者も日本の動物心理学に直接影響を与えることはなく、国際的な活躍という点では動物心理学以

外の領域におけるものが多かった。そのため、以下の本論では、国際的な活動が動物心理学の領域において顕著であった残りの2人である黒田亮と吉岡源之亮を重点的に取り上げることとする。

3. 黒田亮

黒田亮（くろだ りょう, 1890-1947）は東京帝国大学を1915年に卒業後、成田高等女学校や糸魚川中学校の教諭を経て、1920年から新潟高等学校に赴任した。新潟高等学校は旧制高等学校であり、戦前の旧制高等学校には心理学の授業があった。黒田はこの心理学の授業のためにさまざまな実験機器を揃えたが、その中には小動物用の迷路や温覚実験装置も含まれていた（黒田, 1926）。

黒田が動物実験を始めるようになったのはこの新潟着任以降である（鈴木, 1996）。1926年に外地の朝鮮半島に開設された京城帝国大学法文学部の助教授として着任するまでに、脊椎動物（爬虫類・両生類・魚類）の聴覚に関する実験的研究を3本の英語論文にまとめて海外の学術雑誌に掲載した（Kuroda, 1923, 1925, 1926）。このうち Kuroda (1926) は50ページに及ぶレビュー論文である。さらに京城帝国大学に移ってからはカニクイザルの数の弁別に関する英語論文（Kuroda, 1931）を投稿したほか、自身が編集する京城心理学彙報（Acta Psychologica Keijo）を1930年12月に創刊したが、その創刊の辞には「本邦心理学の国際的進出への一步として」これを発刊する旨が書かれている。それを裏付けるかのように、黒田自身は休刊までの9年間で英語論文6本とドイツ語論文2本を同誌に掲載した。

黒田亮の研究の特徴はまずその使用している種の多彩さにある。被験体は魚類から両生類、爬虫類、哺乳類まで多種にわたり、哺乳類もラットだけでなくマカク類のサルも用いている。魚類や両生類における聴覚の存在については、解剖学的な考察も含めて多種にわたる系統発生的な比較を通じて論じており、海外でも先行研究が少ないこの分野に一石を投じるものである。

黒田の国際的な活躍を考えるうえで忘れてはならないのが、これらの英文論文にまとめられている研究がすべて国内（京城帝国大学を含む）で行われたものであるという点である。戦前の心理学者で国内において研究を続けながら、海外の専門誌に4編もの論文を掲載した者は黒田の他にはいない。Kuroda (1925) の冒頭には、先行研究である Kuroda (1923) が発表されたのちに Wisconsin 大学の Pearse 氏がカメの聴覚弁別に関する別刷を送ってくれたという記述があるが、こうした書簡を通じての海外とのやりとりは黒田には相当あったものと考えられる。

その最たるものが *Psychological Abstracts* 誌に日本の心理学関係の論文の抄録を紹介してほしいという編集長 W. S. Hunter からの依頼である (黒田, 1934b)。

ところで、黒田自身は欧米に留学したことが一度もない。このことについて、黒田は『洋行をせざるわけ』という随筆のなかで、自分の職務を果すうえで海外留学をしなければならないとは少しも考えていないこと、また海外留学は確かに比較的容易にできるようになってきたが、「けれども同時に文字を通して広く知識を世界に求め、お互に研究を交換することも亦遙かに容易になって来た」(黒田, 1934a, p.53) ことを綴っている。国内にいながらにして国際的な研究活動ができることは彼自身が証明したといえる。

4. 吉岡源之亮

吉岡源之亮 (よしおか げんのすけ, 1889-没年不明) は大阪生まれの日本人であるが、筆名には Joseph G. Yoshioka を用いている。この筆名の響きから日系人の学者と考えられたこともあるが、『心理学研究』誌に修士論文 (吉岡, 1928) と博士論文 (吉岡, 1927) の一部を掲載していたことから、当時の日本人心理学者とつながりがあったと考えられる。詳細な吉岡の経歴がわかる唯一の資料は1945年刊の *Who's Who* 誌 (1945年1月号の Supplement, p.25) と昭和10年に一時帰国したときの新聞記事 (1935年9月19日付東京朝日新聞夕刊, p.2) のみである。それによると吉岡は1889年3月19日大阪生まれで、1908年に渡米したのち、California 大学 Berkeley 校を1922年に卒業している。同校の大学院に進み、1923年に G. M. Stratton 教授のもとで修士号を取得するが、このときの修士論文は『人間に於ける憤怒の表情の種族的進化の意義』という邦題でのに掲載された (吉岡, 1928)。ヒトの表情を中心とした研究だが、ヒトの表情と比較するために子ザル (および子ザルが抱いているアルビノラット) も用いている。それから3年後の1926年5月にはラットにおける迷路の形態弁別に関する学位論文で Ph.D. を取得した。このときの指導教授であった Tolman の人脈もあって、吉岡は1928年からは Chicago の Institute of Juvenile Research に赴いて Karl S. Lashley のもとでラットの選択行動の研究を行い、1930年からは Florida 州 Orange Park の Yerkes Laboratories of Primate Biology の研究員となった。吉岡は1935年9月に一時帰国して日本各地で講演なども行っているが、翌1936年からはまた Berkeley の研究員として児童の研究などに携わり、以降は比較心理学からは離れてしまったと考えられる。また

第2次世界大戦中に東洋科学文献業務取締や軍関係の極東軍事顧問を務めていたようで、戦後の消息は不明である。

吉岡の研究が直接的に日本の比較心理学者に影響を与えたかどうかは定かではないが、Tolman, Lashley, Yerkes と著名な比較心理学者のもとで研究をする機会を得た日本人心理学者は吉岡を置いて他にはいない。また大学に提出した論文や学界発表の抄録を除いて吉岡源之亮が公に発表した心理学の論文・短報類は27本を数える。このうち4本が日本語論文であり、『心理学研究』に3本の論文と『動物心理』に講演内容を論文化したものの1本が含まれる。日本心理学会の大会にも (代読という形ではあるが) 参加し、1935年の一時帰国時には動物心理学会の顧問も引き受けていたなど、日本の学界と決別していたわけではなかったようである。精神物理学的手法によるラットの迷路上の距離弁別に関する研究 (Yoshioka, 1929) は、吉岡の主たる研究テーマで引用頻度も多い。他にも餌の大きさの選好の研究 (Yoshioka, 1930a) や左右の利き手の問題 (Yoshioka, 1930b) が引用されることがある。

国際的な活躍ということでは、戦前に心理学関係の国際学会で発表した日本人は数えるほどしかない。国際心理学会議についていえば、留学中で参加できた者はともかく、口頭発表を行ったものとして確認できているのは第4回 (1900) の会議に留学中の二人の学者 (谷本富と建部逯吾。いずれも心理学者というよりはそれぞれ教育学者と社会学者) が参加して発表を行ったと思われるほかは、元良勇次郎 (1905, 第5回)、精神科医の榎保三郎 (1905, 第5回)、吉岡源之亮 (1929, 第9回)、力丸慈円 (1937, 第11回) の6人だけであり、このうち動物心理学関係の研究を発表したのは吉岡だけである。

5. おわりに

以上、黒田亮と吉岡源之亮を中心に戦前の日本人動物心理学者の国際的活躍について概観してきた。黒田と吉岡の経歴は非常に対照的である。黒田は東京帝国大学出身で、新潟高校および京城帝国大学で教授職に就きながら研究を続け、海外に留学することは一度もなかったのに対して、吉岡は国内の大学には無縁で、学部も大学院も University of California の Berkeley 校であり、日本でもアメリカでも大学で教えるという地位についたことはなかったようである。黒田が魚類や両生類を含む幅広い脊椎動物を用いて主として聴覚や方向感覚などの研究を行ったのに対して、吉岡は Yerkes の研究所におけるチンパンジー以外はほとんどすべてがラットを用いた研究であり、距離や餌の重さにおける選好を精神物理

学的に調べるものが中心であった。また黒田の動物研究において師といえる者が明確ではないのに対して、吉岡の場合は Tolman や Lashley や Yerkes など名立たる研究者のもとで研究をしたことがあった。

こうした対照的な点がある一方、共通点も見受けられた。まず二人とも動物心理学会(1933年創設)の主軸となる会員ではなかったが、顧問の職に就くなどしてこの学会をサポートしていた点である。第二に、二人ともアメリカの研究者からは日本の代表者だと思われていた点である。黒田が *Psychological Abstracts* 誌の編集者から、日本の心理学の研究論文の要旨を英文にして紹介する役割を担ってほしいと依頼された件は前述の通りであるが、実はこの仕事の前任者が吉岡であった。吉岡は1930年からは Yerkes の研究所にいたために、この *Abstracts* の仕事から離れてしまったと考えられる。30年代前半の吉岡の仕事ぶりについては、論文がなかなか出せないと Yerkes はやや不満であったことが書簡からわかっている。吉岡は論文をまとめることで精いっぱいであり、*Abstracts* 誌の仕事どころではなかったことは想像に難くない。

海外では日本の研究者の代表と思われていた一方で、両者とも戦前の日本の心理学界の主流からは離れていたのも事実である。吉岡においてはそもそも大学で教えたことがなかったで、日本に自分の弟子にあたるような人脈は有していない。黒田は早々に1942年に京城帝国大学を退職し、1947年には病気で亡くなっているため、たくさんの弟子を残すということはなかった。黒田の名前は著書『勘の研究』(1933)によってよく知られており、この著書や他の東洋思想に関する著作への言及は戦後にも見られるが、その一方で『動物心理学』(1936)という戦前でこの分野における唯一の概論書というべき本についての言及は比較的少ない(一例として、黒田の教え子の一人であった大塚鑑[1982]の紹介文を参照のこと)。

このように考えてくると、国際的な交流を保ちつつ、国内でも動物心理学の分野の教育の中心に立つような人物が現れるのは戦後を待たねばならなかったと結論できる。

引用文献

- Boakes, R. 1984 From Darwin to behaviourism: Psychology and the minds of animals. Cambridge: Cambridge University Press. [ボックス, R. 宇津木保・宇津木成介(訳) 1990 動物心理学史: ダーウィンから行動主義まで 誠信書房]
- Kanda, S. 1914a On the geotropism of paramecium and spirostomum. *Biological Bulletin*, **26**, 1-24.
- Kanda, S. 1914b The reversibility of the geotropism of arenicola larvae by salts. *American Journal of Physiology*, **35**, 162-176.
- Kanda, S. 1915 Geotropism in animals. *American Journal of Psychology*, **26**, 417-427.
- Kuroda, R. 1923 Studies of audition in reptiles. *Journal of Comparative Psychology*, **3**, 27-36.
- Kuroda, R. 1925 A contribution to the subject of the hearing of tortoises. *Journal of Comparative Psychology*, **5**, 285-291.
- Kuroda, R. 1926 Experimental researches upon the sense of hearing in lower vertebrates, including reptiles, amphibians and fishes. *Comparative Psychology Monographs*, **3**, No.16, 1-50.
- 黒田亮 1926 新潟高等学校心理学実験室 心理学研究, **1**, 566-568.
- Kuroda, R. 1931 On the counting ability of a monkey (*Macacus cynomolgus*). *Journal of Comparative Psychology*, **12**, 171-180.
- 黒田亮 1933 勘の研究 岩波書店.
- 黒田亮 1934a 瘦松園随筆 三省堂.
- 黒田亮 1934b *Psychological Abstracts* の抄録 原稿に就いて 京城心理学彙報, **2**, 96-98.
- 黒田亮 1936 動物心理学 三省堂.
- 増田惟茂 1908-09 意志作用の比較心理学的研究 哲学研究, **23**, 950-970, 1029-1070, 1139-1176, 1270-1302; **24**, 30-60, 239-262, 352-374, 552-588. (全8回)
- 増田惟茂 1915 魚類の「学習」の実験 心理研究, **7**, 160-170, 336-343, 544-556, 771-778; **25**, 454-461. (全5回)
- 増田惟茂 1923-24 海外心理学晩近の諸傾向と其代表者及著述 日本心理学雑誌, **1**, 269-281, 532-538; **2**, 142-148, 519-523.
- 大塚鑑 1982 黒田亮 日本の心理学刊行委員会(編) 日本の心理学 日本文化科学社, Pp.69-75.
- 鈴木光太郎 1996 旧制新潟高等学校教授時代の黒田亮 新潟大学人文科学研究, **92**, 25-48.
- 高砂美樹 1999 1945年までに海外の専門誌に掲載された日本人心理学者の論文 心理学史・心理学論, **1**, 31-35.

- Utsurikawa, N. 1917 Temperamental differences between outbred and inbred strains of the albino rat. *Journal of Animal Behavior*, **7**, 111-129.
- Wada, T. 1922 An experimental study of hunger in its relation to activity. *Archives of Psychology*, **8**, No.57, 1-65.
- 吉岡源之亮 1927 鼠に於ける迷路形態の弁別 心理学研究, **2**, 815-828.
- 吉岡源之亮 1928 人間に於ける憤怒の表情の種族的進化の意義 心理学研究, **3**, 757-768.
- Yoshioka, J. G. 1929 Weber's law in the discrimination of maze distance by the white rat. *University of California Publications in Psychology*, **4**, 155-184.
- Yoshioka, J. G. 1930a Size preference of albino rats. *Journal of Genetic Psychology*, **37**, 427-430.
- Yoshioka, J. G. 1930b Handedness in rats. *Journal of Genetic Psychology*, **38**, 471-474.
(2012.10.8 受稿, 2012.11.19 受理)